

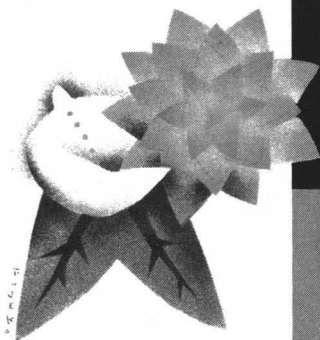


# 社会党

——万年野党から抜け出せるか

高島通敏 著

岩波書店



社会党

シリーズ「日本の政治」

一九八九年一月三〇日 第一刷発行 ©

定価一六〇〇円

(本体一五五三円)

編 者 高 畠 通 敏

発 行 者 緑 川 亨

〒101-02 東京都千代田区一ツ橋二五五  
発 行 所 株式会社 岩 波 書 店

電話 〇三・六五五・四二二  
振替 東京六三六三〇〇

印刷・三秀舎 製本・田中製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

Printed in Japan  
ISBN 4-00-003474-X

## はしがき

先日のサンフランシスコ大地震で、ベイ・ブリッジやオークランドの高速道路が崩壊したのは、地震のもつ長波や中波などのさまざまな波と橋のもつ固有の振動波が共振し、そこに地盤の軟弱性が加わったためだという。同じように、八九年七月の参議院選挙では、さまざまな変動の波と自民党長期支配の地盤の脆弱化が重なって、自民党は、立党以来はじめての崩れ方を示した。

この自民党の敗北の原因のなかには、もちろん、リクルート事件や消費税あるいは首相の女性スキャンダル問題というような短期的な変動波があり、また政權に直接関係せず、世論の風向きに敏感な第二院という参議院に固有な振動波の問題があつて、それらが直ちにこれから後にくる衆議院選挙へと連動するという予測は、今のところ立て難い。事実、翌月、クリン三木元首相の「秘蔵っ子」海部首相を推し立てて態勢を立て直し、また消費税の「見直し」を打ち出した自民党は、九月以降、次第に支持率を回復し、一時の混乱から抜け出した。

しかし、それはこれからの日本の政治が、かつてのような自民党の一方支配体制に復帰してゆくということを、直ちに意味してはいない。参議院選挙における自民党の敗北には、同時に

国際化の時代における日本社会の変化、自民・社会両党の構造変化という、より長期的な変動波や自民党支配の地盤の脆弱化の問題がふくまれているからである。社会の変化は、農民の自民党離れ、女性の政治進出という現象に顕著に現われ、政党の構造変化は、自民党の派閥構造の組織化と硬化、社会党の女性党首と市民政党化という形で現われている。いうまでもなく、自民党のそれは党勢の下降の、社会党のそれは上昇の長期要因となっている。

もし、八九年参院選における社会党の勝利が、単純な一時的、短期的な要因にのみ基づくものであったなら、その後の政局およびジャーナリズムにおけるあれほどの緊張感は生まれなかっただろう。そこに、七〇年代後半以降の日本政治の長期的観察にもとづく自民党一党支配の終焉への着実な潮流をひとびとが感じとったからこそ、日本政治の転換をめぐる論議の渦が、保守・革新いずれの陣営のなかからも吹き上がったのだった。

このようにして日本社会党は、五五年体制成立以降はじめて、自民党に代わって近い将来政権を担う可能性のある唯一の政党として、論議の焦点に立たされることになった。たとえば社会党の単独政権は当分不可能だとしても、自民党が政権から滑り落ちたとき、交替政権の中心になるのが野党第一党としての社会党であることは、自明であるからである。政権政党として自民党があることが当然視された五五年体制の下で、その議席の半分にも満たない社会党は、いっしょに労働組合など少数勢力の利益代表、自民党の暴走に歯止めをかける野党としての役割を

割り振られ、それに自らも甘んじてきたのが実情だった。こうして定着した万年野党、批判政党としての位置から抜け出して、政権政党、責任政党としての位置に社会党はたして辿りつくことができるか。それがまさに問われようとしているのである。

本書は、日本社会党の歴史、組織やイデオロギー、政策などの現状についての解剖の書であると同時に、社会党が政権政党へと脱皮するためのさまざまな提言の書でもある。提言は、一見、社会党のためになされているように見えるが、掘り下げてみれば、必ずしも狭い意味での社会党のためというよりも、日本の現状において自民党に対抗するもう一つのあるべき政党のためになされていることが了解されるだろう。かつてA・ダウンズが古典的に指摘した「民主主義の経済理論」ように、成熟した政党政治において政権政党をめざす政党は、お互いに異なる展望や価値観の下に、しかし共に有権者の支持を極大化すべく努力する。そのどちらを欠いていても、帰結するのは一党支配の政治であり、政党政治のシステムの崩壊である。

日本社会党に長い間つきまとい続けたものは、イデオロギーの上での純一性を求めるあまりの、支持の極大化への努力の断念であり、結果としての万年野党に甘んじることであった。そして、それからの脱却を求める「現実主義」の掛け声は、しばしば、保守党や他の中道政党の示す展望や価値観への実質上の合流を意味していた。このジレンマから抜け出せない限り、社会党に、自民党に代わる政権政党としての未来はない。そしてそれは取りも直さず、日本の有

権者にとって、政権交替による政治の周期的な再生への道が永久に閉ざされていることを意味する。

参議院選挙後の慌ただしい状況のなかで書き下されたこれらの提言は、それぞれの執筆者個人の資格でなされたものであって、そこに共同の計画はない。だが、多くの点で互いにオーバーラップするこれらの提言を通じて、いま日本の責任野党に求められているものがなにかについての議論の渦がさらに拡がれば、本書を編んだ目的は十分に達せられたというべきだろう。

一九八九年十一月

高 島 通 敏

はしがき

I 社会党四十四年の歩み ..... 石川真澄 ..... 1

——結党から「土井人気」まで——

一 貧しい時代のイデオロギー ..... 3

1 片山・芦田内閣の経験（一九四五—四九年） ..... 3

2 左派の優越へ（一九四九—六〇年） ..... 17

二 豊かな時代の長期低落 ..... 27

1 転換の模索と挫折（一九六〇—七五年） ..... 27

2 追いつめられた選択（一九七五—八九年） ..... 36

II これが社会党だ ..... 椎橋勝信 ..... 43

党員 ..... 45

一二万党員で二〇〇〇万票／「民主集中」廃棄で党員拡大／

日刊化できない機関紙

日常活動 ..... 52

|                                         |     |
|-----------------------------------------|-----|
| 一三三人の書記／中央執行委員会が木曜日のわけ／<br>根回し機関の「企画会議」 | 60  |
| 土井委員長                                   | 60  |
| 助っ人に将来を託す／土井ブレーン／女性進出で体質改善なるか           | 73  |
| 派閥                                      | 73  |
| 左右の抗争はなくなったが：／いま社会主義協会は                 | 84  |
| 労組                                      | 84  |
| されど労働組合                                 | 88  |
| カネ                                      | 88  |
| 苦しい台所                                   | 90  |
| 路線対立                                    | 90  |
| かくして新宣言は採択された／社会党のめざす連合政権               | 105 |
| III 社会党にもの申す                            | 105 |
| 一 社会党はいま、何をなすべきか                        | 107 |
| 高島通敏                                    | 107 |

|   |                      |           |     |
|---|----------------------|-----------|-----|
| 二 | 経済政策を考えるための基本理念…………… | 伊東光晴…………… | 153 |
| 三 | 消費税をどう見直すのか……………     | 新藤宗幸…………… | 201 |
| 四 | 外交と安全保障政策に提言する……………  | 浅井基文…………… | 239 |

写真提供・毎日新聞社

I  
社会党四十四年の歩み

——結党から「土井人気」まで——

石川 真澄



## 一 貧しい時代のイデオロギー

### 1 片山・芦田内閣の経験（一九四五—四九年）

#### 社会党の結成

日本社会党の結党大会は、一九四五年一月二日午前一〇時二〇分から東京の日比谷公会堂で、約二〇〇〇人（月刊社会党編集部「日本社会党の三十年」一九七四年——以下「三十年」と略記する——による）を集めて開かれた。太平洋戦争の降伏から二ヵ月半、戦後最も早く結成された政党である。

ここに到るまでには、一九四二年の翼賛選挙に非推薦で当選し、敗戦時にも衆院議員であった西尾末広（のち片山哲内閣官房長官）、平野力三（同農相）、水谷長三郎（同商工相）ら「結党三

人男」の活動が目ざましかった。西尾は八月一日に大阪にいたが、天皇の放送を聞いてすぐ京都の水谷宅を訪れ、社会主義政党をつくる構想を話した。一八日上京、少し遅れて来た水谷とともに東京・新橋駅前の蔵前工業会館内に事務所のあった平野と落ち合い、敗戦の混乱のなかで準備を進めた。

そのほか戦前の無産政党に属していた河上丈太郎（のち社会党委員長）、三宅正一（のち衆院副議長）らのグループ、鈴木茂三郎（のち社会党委員長）、加藤勘十（のち芦田内閣労相）らのグループも会合を重ね、新しい政党結成を模索した。

結党までの経過では、前後して保守政党的結成に動いたグループとの接触もあった。西尾ら「三人男」は、八月二五日を最初として銀座の交詢社で鳩山一郎、植原悦二郎、大野伴睦、安藤正純、芦田均たち、主としてこのあと自由党をつくる人々と何回か会合している。西尾によると、鳩山らは「協力して新党をつくりたい」ということであつたが、「われわれ大人」は一緒にやれても、「お互いの背後にいる多勢のもの」はそうもいかないだろうとなつて、「政治的余韻を残したままで別れた」（『西尾末広の政治覚書』毎日新聞社、一九六八年）という。ここには、やがて保守派との連立政権をつくる伏線がある。

また、三宅らは公爵・近衛文麿の側近で大政翼賛会初期の事務総長であつた有馬頼寧を党首に、日本商工会議所理事長・船田中（のち衆院議長）を書記長にという構想を持っていたという

し、愛知県出身の加藤は旧尾張藩主家である侯爵・徳川義親を立てて動いた。八月二四日には、加藤のとりもちで徳川邸に「三人男」のほか、鈴木、片山ら一四、五人が集まったりした。

九月二二日、日本無産運動の長老、安部磯雄、高野岩三郎、賀川豊彦の呼びかけで、単一社会主義政党的結成準備懇談会が蔵前工業会館で開かれた。出席した荒畑寒村によると、「懇談会には名古屋の『忠孝労働組合』の山崎某も出ていれば、右翼の津久井某も来ており、浅沼稲次郎が開会の挨拶の中で堂々と国体擁護を主張するやら、最後には賀川豊彦が天皇陛下万歳の音頭をとるやら、遺憾なくその本質を暴露し、私たちの一団は天皇陛下万歳の唱和に憤慨して退場した」(『新版・寒村自伝』筑摩叢書、一九六五年)という雰囲気であった。

九月二七日、創立準備委員を決め、一〇月一五日に党名と綱領を内定した。党名は「日本社会党」と「社会民主党」とが争ったが、採決で前者に決まった。そのかわり、英語名は「Social Democratic Party of Japan」とした。綱領は次のように簡単なものだった。

一、わが党は勤労階層の結合体として国民の政治的自由を確保しもって民主主義体制の確立を期す。

一、わが党は資本主義を排し社会主義を断行し、もって国民生活の安定と向上を期す。

一、わが党はいっさいの軍国主義思想および行動に反対し世界各国国民の協力による恒久平和の実現を期す。

こうした準備ができていたために、一月二日の結党大会は「シャンシャン大会」であった。役員も、委員長を空席とし(将来「名望家」を据える含みとされた)、書記長を片山とするほか、常任執行委員の顔ぶれまですべて事前の相談通りに決まった。

党づくりは西尾ら右寄りの「三人男」が主導したから、のちに左派が主導権を握るようになった時期の党の関係者からは、「初期の思想的体質は古い西欧型社民そのものであり、実践的体質は日本の非近代的な支配階級と十分協調しうる泥くさい妥協屋であった」(清水慎三『日本の社会民主主義』岩波新書、一九六一年)と評されるものができた。

一九六一年の用語としては「西欧型社民」が否定的に使われているが、当時の西尾ら主流の意識が「西欧型社民」でさえあったかどうかは疑わしい。たとえば一九四六年三月六日に発表された政府の新憲法草案(マッカーサー草案に基づく)に先立って二月二三日に決定した社会党の新憲法要綱では、「主権は国家(天皇を含む国民協同体)に在り。統治権はこれを分割し、主要部を議会に、一部を天皇に帰属(天皇大権大幅制限)せしめ、天皇制を存置す」(括弧内原文など)としていたのである。

この社会党が結党からわずか一年七カ月後には史上初めての政権の座につくのだが、ここで、社会党の前史を概観しておくことにしよう。結党時に始まり、以後ずっと党内に影を落とす右派対左派の対立と、両派それぞれの行動や考え方の特徴とを見るには、前史を知っておく必要

がある。

## 前史——社民・日労・労農

日本の本格的な社会主義政党的先駆は、二〇世紀の初頭一九〇一年に結成された「社会民主党」であろう。一八九八年創立の社会主義研究会を発展させて、片山潜、幸徳秋水、安部磯雄、木下尚江らがつくった党だが、内務省から即日結社禁止を命じられた。

次いで、一九〇三年、幸徳、堺利彦（枯川）らが日露戦争に対する非戦論を掲げて「平民社」をつくり、一九〇六年には平民社を主な母体として「日本社会党」ができる。しかし、これも翌年には治安警察法によって解散させられる。

これらは、いずれも短命に終わった社会主義政党だが、一九一七年のソビエト革命を受けて二二年に創立された共産党以前に、日本でも社会民主主義政党の歴史が先行していたことを示している。「社会民主党」は宣言のなかで、党の抱負を実行するに当たっては「剣戟よりも鋭利なる筆と舌」「軍隊制度よりも尚ほ有力なるべき立憲政体」を利用するのだから、「何ぞ白刃と爆裂弾との助を借るが如き愚を為すを要せんや」と述べていたし、一九〇六年の日本社会党も党則に「わが党は国法の範囲内において社会主義を主張す」と定めていた。

しかし、これらはいわば日本の左翼政党全体の先駆であった。戦後の社会党とのつながりを